

## 埴谷雄高における語りの仕掛け

### Narrative Devices in Haniya Yutaka's Fiction

Jacques Levy\*

The formation of real and imaginary worlds around the centers of existence and the ego has been the consistent theme of Haniya Yutaka's writing, from his early works up to the present, and regardless of whether the approach to that theme has been philosophical, or taken the form of the novel of ideas or that of aphorisms, the theme itself has revolved within the same orbit. At the same time, readings of Haniya's writings which focus on style and narrative technique, such as have begun to appear in recent studies of Haniya, make it apparent that several types of narrative devices are deployed by Haniya. The present report will attempt to clarify the narrative devices in Haniya's writing in the light of the interplay of narrative and text which weaves the literary space of that writing. I will take as examples the 1960's text, *Yaminonaka no kuroi uma*, and the 1970's text, "Muma no sekai," which makes up chapter 5 of *Shiryo*. By contrasting the ways the various "I's" of the narrator and the first person protagonist of the former text intervene in the narrative with the ways the narrator in the latter organizes the multiple third person protagonists, I will establish the foothold

---

\* パリ第7大学文学部極東研究科博士課程

for a classification of narrative structures in Haniya's writing.

The foundations for such a classification will have to begin with a reconsideration of existing studies of Haniya, in the light of the problem of narrative devices, while deriving a theoretical framework for narrative classification from French structuralist and post-structuralist literary criticism, particularly that of Gerard Genette. The importance of the latter framework is that Genette and his colleagues are not interested in the simple hermeneutical analysis of existing texts, but instead conceive of the hierarchical relations among narrators and characters as determining the potential structures of narrative, and such a conception can be said to correspond precisely to the construction of the text through the superposition of inquiries into existence upon experiments in the power of imagination, which constitutes the practice of Haniya's writing. Hence this classification will approach the structuring of narrative devices in terms of the possibilities of linguistic action, and for this reason the trajectory established by the theory of speech acts developed in British philosophies of language will guide this study, as well, offering the basic categories for a dynamic classification.

この発表では埴谷文学における語りの体系の研究に関して二、三の見解を断片的に提示させていただきます。

語りの「体系」、「構造」。「仕掛け」等と呼ばれる領域の分析とは如何に規定されるのかと問われたならば、それは文学作品に対する次のような相対立する二つの典型的な態度を分かつ方法論として捉えられる、と言えるのでは

ないかと考えます。

その対立する二つの研究態度の特徴を図式的に描くとすれば次のように区別できます。

一つの研究態度は小説の中で、意味、メッセージとして言い表わされると思われる<sup>ディスクール</sup>言述を対象にし、その解釈を目指します。それに対立する他の研究態度は、作家の意図と受け取られて来た解説または制定された作品イメージに閉じ込められた解説から離れて、独立した言葉の運動、言語行為論、物語の場面論の視点から出発し、作品という言語空間を、新たな意味を生み出すダイナミックなカテゴリーによって論じようと狙います。

この私の描き方から見て、二番目の研究態度に属する方法論を埴谷文学の研究のために採用したいということは言うまでもないことです。しかし解釈という概念自体は多様な意味を持っていて、もし悪い意味にとると、解釈からいくら離れようとしても、やはり解釈に強く戻ってしまうので、その点、いくらか用心が必要です。文学作品における語りの構造の分析の発展によって編み出された方法論、とりわけ G.ジュネットの物語論は、具体的にテキストを構築してゆく文学的実践の分析にふさわしい理論的枠組であるといえると思います。したがって、他のタイプの研究方法に踏み込む前に、つまり有力な解釈方法あるいは反解釈論的方向に入る前に、G.ジュネットの物語論による分析を行うことはかなり有効なフィクションへのアプローチになるわけです。

さて、語り手と登場人物の織りなす重層的な関係を、埴谷雄高のフィクションはどのような構造として提示しているのかという問が今の私の主題なのですが、語りは、ある主題、ある「事件」の語りであるわけですから、まず埴谷雄高の小説のテーマ、内容、題材と呼ばれるものについていくつかの問題に言及した上で、それらがどう語りの研究と係わるかを考えてみたいと思います。

埴谷雄高の作品の中で、フィクションとしてのテキストには、「死霊」という30年程前から書き続けられている未完の長篇小説と、いくつかの短篇小説

とがあります。「死霊」では、一番最初の語り手による語りの中で登場する人物が、その語り手の役を取る多くのレシー (récit)が複雑に構成されています。短篇小説は、「洞窟」という初期作品を除くと、語り手と、一人称で現われる登場人物としての「私」とのたえ難い枠組を備えています。「死霊」は未完である限り、いくら作家が「死霊」とは別の所でその全体の主題を説明していても、「死霊」の完成した主題を一口に要約して言い表わすことはできません。(例えば、G.ジュネットがプルストの「失われた時を求めて」を要約すれば、その主題が「マルセルが作家に成る」ことであるといえるように)。それに反して、長篇小説の途中で導入された物語と短篇小説は、あまりにも多くの事件、挿話、夢、回想を語っていて、困ったことになかなかただ一つの出来事に還元できないのです。埴谷の小説は、「概念」を主題にしているのだと宣言することがこれまで大方なされてきた批評の前提であって、従来の埴谷論は、その主題として把らえた「概念」たとえば(自同律の不快)「虚体」「のっぺらぼう」等を解説することに努めていました。しかしそれらの「概念」は、正確に言えば「概念」と規定できるのは疑わしいことですし、むしろ語りの出発点というより帰結であるということの方が正しいと思うのです。とにかく、いくら「概念」的と見なされていても、小説であるかぎり、ある出来事が語られているのは無視してはならないと考えるのですが、その出来事が不思議なほどに突き止め難く、思いもかけなかった所に潜んでいるのが埴谷文学の一つの特色といえるでしょう。この発表の題名にふさわしいように言い換えると、埴谷雄高の小説における語りの仕掛は、あたかも多くの推理小説が、語りの仕掛によって犯人を隠すように、その主題を隠してしまうものといえましょう。

そうであるとしても、その多数のレシーの題材によって構築される枠組としての主題は次のように簡単に表示することができます。すなわち、現われる様式が一人称であれ三人称であれ、一人の主人公が、自我をめぐる付きまとう渴望に応じて内界で発言される呪文を遵守して、想像界の形象を創造し、更に極限の体験、あるいは自己の崩壊にまで至るように仕向けて行くも

のである、ということです。言うまでもないことですが、このような図式だけで埴谷の物語の内容の複雑さと変貌をすべて叙述できるというつもりはありません。しかも、この一貫した存在論的な現実界と想像界の構成を唯一の主題と率直に受取ってしまいますと、レシーを通して組み合わせられてゆくちりばめられた意味の雑音、小片、潜在的な力を軽視し、ダイナミックな想像力による語りの論理をつかまえそこなうのではないかと思われます。ここで強調したいのは、埴谷の小説をフィクションとして取り扱うかぎり、上述したような枠組みとしての主題と、実践的な結果として現われる主題との隔たりの表示出来る方法論が必要だということです。

さて、そろそろ『闇の中の黒い馬』という題名を持つ短篇集を取り上げて、具体的な語りの分析の初歩的な試みを始めるときでしょう。この短篇集では一人称の語り手によってはっきりと区別できる二種類の物語りの形式の交代を保ちながら、一貫した形で展開するように見えます。一読すると、語りに動機を与える時機があるように思われます。一方では夢を実験対象にする企みの説明、つづいて達成した夢の解説、他方では断片的ないわゆる夢物語。読者はその設定を夢／現実、妄想／判断、幻想／推論等の<sup>パラダイグマティック</sup>互換的な対照に従う語りの構造として初めは把らえざるをえません。

ところがこの夢をめぐる短篇小説群の特殊な技術・工夫は、そのような対照と識別の攪乱にこそあるのです。二つの語りの極地を限定していたはずの輪郭は次々とおぼろげになっていくのです。そして初め提示されていた意図が別のものにひきかえられて再び形づけられるように見えるのです。

このような見方は読書の感想にすぎないように思われるかも知れないので、具体的な語りの分析に移って、どのように、推論的な場面と夢幻的な場面とが語りの仕掛けによって混線するかを明らかにしたいと思います。

あらゆる言表は飽くまでも言表行為の痕跡であって、語り手を作家と見做すことは出来ません。作家と語り手の区別が、フィクションと小説ではない他の種類の書物との確実な差違であり、作家自身が語っていると思われる曖昧性があるとしても、またはそのような信仰を引き起すタイプの小説の場合

でも、それはフィクショナルな語り手の仕掛けにすぎないのです。G.ジュネットは語りの分析の為に様々な基準を利用するのですが、それはたとえば「順序」(ordre)、「持続期間」(durée)、「頻度」(frequence)、「モード」(mode)、「声」(voix)―、ここではとりわけ物語に対して語り手の「水準」(niveau)、「関係」(relation)、と「焦点」(focalisation)を組み合わせる語りのシチュアション(状況)の問題を取り扱うにとどめます。

ところで、語りにおいての水準とは、語り手が語り手として物語の中に現われるか現われないかのことで、現われる場合はジュネットの用語で *Intradiégetique*(場面内の語り) 現われない場合は *Extradiégetique*(場面外の語り) と呼びます。言い換えれば、*Intradiégetique*(場面内) の語りは物語の中で或る語り手によって語られる物語の中の物語 (*Métarécit*) であり、*Extradiégetique*(場面外) の方は小説の一番目の水準の物語 (*Récit premier*) であることです。「関係」を分ける範疇の *Hétérodiégetique* は語り手と主人公が別の存在である場合(三人称)で、*Homodiégetique* は同じ人物(一人称)として現われる場合です。そして、「焦点」の種類は次の三つのカテゴリーに区別されています。すなわち語りと特定の一人の登場人物を同一のものとして結びつける焦点が認められない場合の中性の焦点と、外面の焦点と内面の焦点の三つです。

埴谷雄高の夢をめぐる短篇小説の語りの構造を、一貫して図式化しようとする場合、初めに現われる登場人物としての語り手の環境と、夢の中で登場する「私」の舞台が、語りの視点から同等のものに見なせるかどうか、第一の問題となります。換言すれば、もしこの語りの世界の違いを認めなければ、この二つのレシーは *extra-homo-diégetique* なレシーに属することになります。つまり自伝的なタイプのレシーに類似する一人称小説になってしまいます。ところが、もしこの語りの世界の違いを認めるならば、つまり埴谷雄高の論理によれば、彼は夢の現実性を、現実の現実性と同類のものとして扱おうとしていることを考えると、この二つのレシーの内界としての差は、二つのタイプのレシーを導入することになります：一番目の語りの場面が

extra-homo-diégétique になり、そして二番目の夢の場面が intra-homo-diégétique になります。ただ、ここには次の様な問題が生じてきます。それは、全体の物語は、実は同じ外場面的な語り手によって語られている限り、そして登場する「私」は物語の中で、語り手としては現われないだけでなく、一言も発話しないことを考えると、こういった分析は、普通の論理からすれば受け容れ難いものとなってしまいます。そこで、私は次の様な視点を導入したいのです。「ある工夫を凝らし得れば」という表現が偶々、この小説に現われてくるのですが、それは何を工夫するかと言うと、夢の制御ですが、それは同時に語りの制御にも応用できる仕掛けではないでしょうか。夢の中で、成し遂げられる工夫とは、物語内容の水準では私という現象を、他の何か密度を欠いた、「形なき形」とか宇宙自体に拡大して限度をなくした現象に逆転してしまいます。語りの水準では、語り手自体が非登場性、つまり、語り手が、語りの構造を変化させずに、語り手として登場できないことなのですが、その非登場性を支えとして、物語は一般の extra-homo-diégétique な語り方から脱け出たまま、登場人物としての私を排除して、背反的に最後には、非登場性としてあった、しかもその非登場性を保持しながら extra-diégétique(場面外) な語り手にしか還元されなくなってしまうのです。結局、いくらあらゆる物語の現象を排除し、主人公まで排除してしまっても、語り手だけはエクリチュールがある限り消滅しないのです。しかも、その虚構の語り手は作家という人間像に決して還元できない、「物語」が形づくる力<sup>アンスタンス</sup>域なのです。

以上の分析は、比喩的でもあり、ある特異な語りの構造を提示するにすぎませんが、「焦点」という視野を介入させれば、この問題は水解する様に思えます。夢という舞台を使うことによって、同質の内界にいながら、普通は内界的な「焦点」に限ってしまう「私」への「焦点」を、余り作為を読者に感じさせずに、徹底的に外界からの「焦点」に変貌させるのです。そうすることで、普通、存在する、中性か内界の「焦点」の homodiégétique な物語から、ある種の幻想小説あるいは探偵小説にしか見られない、外界の「焦点」

の *homodiégétique* な物語に変容させるのです。そして、読んでいると気付くことですが、内界の囁きや様々な内界的感覚が、増殖して言って、全く外的な形なき現象に到達するのです。それをある種の思弁的思索によって成し遂げ、S.F や幻想文学のジャンルに接近しながらも、その小説の技術を体現せず、一種の可能な語りのタイプを組み立てているのです。

そろそろ時間も残り少ないことですので、結論に移らせて頂ければ、

『闇のなかの黒い馬』の中に納められている「私のいない夢」という題名こそは、この短篇小説群、ひいては埴谷文学の特異性を見事に結晶させている題名であるといえるのではないのでしょうか。

## 討議要旨

司会者から、結論として挙げた「私のいない夢」という題名が埴谷文学の特異性を結晶させているとはどういうことか、フランスで今流行している文芸批評の一派の考え方や用語に通じていないと理解がむづかしいことかと思うが、語りについて埴谷雄高の特異性というのはどこでしょうか、と質問があり、発表者から、

「私のいない夢」という題名が、私という登場人物を排除する小説の技術、登場人物になり得ない無人称の語り手の役だけを残す手法を実践していることを暗示している。埴谷雄高は夢の扱い方に特色があり、普通の幻想的な夢物語りとしてではなく、思索のために使って、最初の形を最後の形へ導くに用いていると回答があった。

ムルハーン氏から、アメリカでは今、意識ということが問題にされており、「私」が登場しなくても「私」の意識が表現されているのではないかと質問があり、発表者から、意識の表現とも見られるが、表現の方法の作家、語り手、登場人物の役割の逆転に特色があると回答があった。

また、山下宏明氏から要望として、構造的な問題なので図式化して示されると判り易い。また、フランスで今語り方が問題になっていてG.ジュネットの物語論が出てくる背景を教えていただけると日本の物語研究にも参考になる



うと発言があった。